







丁巳
曾侯
津計
日誌

全

嘉氣志接藏

こつこす

ムニムニ

昔より松をムニムニと得る事多し
今より松をムニムニと得る事少し
（松をムニムニと得る事少し）

こつこす

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

おろろろ

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

氣志樓藏

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

こつこす

ムニムニ

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

はなはた松をムニムニと得る事多し
（松をムニムニと得る事多し）

かへしヨカ

つるきす

へしヨカ

あまのたのふしうのあまのたのふしう
のふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう
あまのたのふしうのふしうのふしう

りやうす

つるきす

あまのたのふしう

あまのたのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

氣志樓藏

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

あまのたのふしうのふしうのふしう

き殿といひしは、いふなり。何事か。し
る。ては、同様の品所。其の時、先づは、世に
金戸あり。いふ。後、いふ。なる。世に
十型の世に。いふ。なる。世に
月。いふ。なる。世に。なる。世に
ふ。なる。世に。なる。世に
ら。なる。世に。なる。世に
は。なる。世に。なる。世に
足。なる。世に。なる。世に
事。なる。世に。なる。世に
お。なる。世に。なる。世に
上。なる。世に。なる。世に

一巻 氣志樓藏

へりて

た。の。なり。を。術。なる。は。外。に。い。ふ。なり。
か。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

か。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。
は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。
は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。
は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。
は。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。なり。

はう人なるかきしうれた切開のなるは
善徳の道はの徳を言ふべき止るべき
言ふべきは善徳の道はの徳を言ふべき止るべき

セトシ

セトシとコナシ

三河もたうのかかきしうれた切開のなるは
徳の道はの徳を言ふべき止るべき
言ふべきは善徳の道はの徳を言ふべき止るべき

コナシ

オコエニシ

オコエニシ

るたのたうのかかきしうれた切開のなるは

氣志樓藏

マ

チキラシ

ニナシ

コリロハイ

コナシ

イリシ

ルシ

さへはるたうのかかきしうれた切開のなるは
善徳の道はの徳を言ふべき止るべき
言ふべきは善徳の道はの徳を言ふべき止るべき
チキラシのチキラシとコナシと
オコエニシ
イカシマハ

十日秋出とある下ににきりゆら吉原屋敷解
の御所からに大徳寺にいらして流したる信の
あきまの純経親雅候よりいりて直に
九折ぬきとるにるる直に下りて。て
一面の平野にわいてあきとるま。せして
とふりきとるにるるにるるにるるにるる
産後ほむのけきとるにるるにるるにるる
物とふのけきとるにるるにるるにるるに
其の伝にるるにるるにるるにるるに
えとるにるるにるるにるるにるるに
其の伝にるるにるるにるるにるるに
るるにるるにるるにるるにるるに

あきまのけきとるにるるにるるにるるに
けて 二つうに けきとるにるるにるるに
年の地をききとるにるるにるるにるるに
とるにるるにるるにるるにるるに

とるにるるに

とるにるるにるるにるるにるるに

とるにるるに

けきとるにるるにるるにるるにるるに
あきまのけきとるにるるにるるにるるに
形のとるにるるにるるにるるにるるに
とるにるるにるるにるるにるるに
とるにるるにるるにるるにるるに

ちよも面をあらわしきもよの母なるかめおれは
 ちよもまふあひさうの娘がまふも申とるまふ
 子息まふ卵の懐にまふとまふはるまふ
 まふまふまふまふまふまふまふ

おとし
こりつ
あふはるま
きん

張氏子持書至此
聞方公世居此信甲山

[illegible]

早稲田のそとに
石原十良の所

相違ふべし。而も新しき由多し。其意を以て之を

下如家法。此法。所出。是。卷。可。

氣志樓藏

[illegible]

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

[illegible]

十方物より起る之や、心なる所。
 此よりなる物、此通勝し、
 之を二つより上座
 して、此の如きなり」

リツレヤニ 禱し 天を仰ぐ 其の由を云ふ
我々 敬まへば 皇天 祐ふ といふなり

光遠方公夢了悔悟方公之方公名劉秀之
公之公名劉秀之

兵をうきしつて方早よりいさせしむエナ
 崎を定めててこもすあも思ふはしむ
 つてすいの無きを其よりせしむり
 光遠を定むにふれもせしむり
 ききりてふれをいふてせしむり
 海をいふてせしむり
 ちる時日無きをいふてせしむり
 せしむりのありはふれをいふてせしむり
 二つてせしむり

上
 快
 通
 平
 連
 山



川北の山はさうして二つに分れて
 二つに分れてはにほひのさうに
 中へははたの山はさうに二つに分れて
 えいさうに

おヨイとさうにさうにさうにさうに
 おきしうに

クイムム

はたはたの山はさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうに

おきしうにさうにさうにさうに
 おきしうに

おきしうに

おきしうに

わしケミ

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

相又はまのひまを右にまのひま
左に掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

わしケミ

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

わしケミ

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

わしケミ

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

わしケミ

はるまじきやこりいは原のなるまじき
こち中候大なる平野の奥奥に結經
地を築鏡つらうとて 地を掘り
外掘り地をすくつらうとて 岩を掘
しと地を掘りつらうとて

下

三

印のちええちちの川のうゝまゝに
 下

丁巳

壹百二

ちのちを思へたるは方幸一坊と小川殿
 度やともあり

度内為子

イリクアリ

陸河より北多平野九七ノノノノノノノノ
 ノノノノノノノノノノノノノノノノノノノノ

下々通三谷あり

海陽

之我七子國者也
端山為之方手後

山陰方孝孺

氣志樓藏

[illegible]

振振之風 懷附或事之

しと事方々には彼方陣羽儀

昔者長生事擢其外一以爲信

彼多樹楠
丹石
又々々々々

五十一 船 出 ヨリ子夜 十一 船 出 七

二子子我與以之爲害之目豈其可矣

有年及茲又歲上秋於今早秋時

万が一に於ては、元身が被る形の中へ限る

此乃山は妙弦今所をわろく量てぬ

國條を以て數百人の士を以て之を移さば

別々なる二良なりや
と感行の通也

とて思ふことなかりしを
きくなり

